慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

慶應義塾大学病院
信濃町駅前・各種診療
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

第54回 東医体 総合優勝！

昨年の雪辱を果たす すばらしい活躍

慶應医学部が、第54回東日本医科学生総合体育大会（東医体）において総合優勝の栄光を手にした。前回大会で6位に甘んじ、3連覇という偉業達成を目前で逃した本塾医学部にとって、この結果は新たな連覇記録への第一歩となるだろう。（8月16日現在。本紙調べ）

第54回東医体夏季の部は、7月30日から8月14日の日程で開催された。本年度の主管校は聖マリアンナ医科大学・筑波大学・昭和大学・東京医科歯科大学の4校である。東日本大震災の影響で当初は開催すら危ぶまれたが、主管校の熱意と東北の各医学部の参加意思により、さまざまな問題を乗り越えながら運営が勧められた。主管校・参加校の協力によって、競技によっては例年と試合構成を変えるなど縮小開催を行いながらも、無事に全日程を終えることができた。

今大会で慶應は4競技において優勝を飾り、さらに準優勝・3位を獲得した競技がそれぞれ3競技ある。常勝競技もあるが、大きな躍進を遂げた部活が多いことが、総合優勝を実現した一因であろう。

紙面では8連覇をという輝かしい記録を残している水泳部、4連覇を果たしたゴルフ部を始め、5年ぶりの優勝をおさめたバレー部、昨年の雪辱を果たした硬式庭球部を取り上げた。さらに、競技主管の大役を務めながら準優勝の端艇部も取材した。個人戦で優秀な成績を収めた柔道部・弓道部・馬術部についても結果を紹介する。

（5年　山本一希）

	1位	2位	3位
総合順位	慶應	新潟	秋田
陸上（男子）	東大	新潟	慶應
陸上（女子）	秋田	慶應	山形
硬式野球	獨協	日医	岩手
テニス（男子）	慶應	東北	日大
テニス（女子）	福島県立	筑波	山形
ソフトテニス（男子）	群馬	東医	山形
ソフトテニス（女子）	福島県立	北海道	岩手
卓球（男子）	千葉	群馬	山形
卓球（女子）	女子医	秋田	日医
バレーボール（男子）	慶應	自治医	慈恵
バレーボール（女子）	防衛	秋田	弘前
バドミントン（男子）	筑波	東北	秋田・福島県立
バドミントン（女子）	弘前	岩手	秋田・昭和
サッカー	新潟	札幌医科	筑波
バスケットボール（男子）	新潟	東邦	東海
バスケットボール（女子）	筑波	女子医	群馬
柔道（男子）	東海	旭川	防衛・埼玉
剣道（男子）	昭和	秋田	筑波・札幌医科
剣道（女子）	群馬	秋田	慶應・女子医
弓道	東北	新潟	群馬
空手（男子）	防衛	岩手医科	自治医
水泳（男子）	慶應	東北	医科歯科
水泳（女子）	山形	秋田	順天堂
ヨット	横浜市立	順天堂	慶應
ボート	山梨	慶應	北里
馬術	昭和	慶應	慈恵
ハンドボール	東京	山梨	日医
ゴルフ（男子）	慶應	聖マ	杏林
ゴルフ（女子）	慶應	不明	不明

バレー部 男子5年ぶり優勝

8月2日から6日にかけて栃木県の鹿沼総合体育館で行われた東医体で、男子バレー部が見事優勝を果たした。実に5年ぶりの快挙である。この優勝について、主将の稲毛純君（4年）に話を聞いた。

「今年はメンバーも揃っていたため優勝を目指していた」そう稲毛君が語るように、バレー部は東医体優勝を目標に練習を重ねてきた。

まず、強みである平均身長の高さを生かしたブロックで得点できるように練習した。また、試合に出始めたばかりの下級生にしっかりと指導を行い、チーム全体の底上げを図った。

セッターである稲毛君個人としても意識していたことがある。チーム全体の雰囲気を壊さないようにするため、各部員に細かいことは言わず楽しくやれるように努めた。また、スパイカーが気持ち良く打てるように、トスの質とトス回しを今まで以上に気をつけて練習した。

「優勝した瞬間は実感がなかったが、時間が経つに連れ、嬉しさが徐々にこみ上げてきたと同時に、周囲への感謝の気持ちでいっぱいになった」と、快挙の瞬間を振り返る。

最後に、これからの目標について稲毛君に聞いた。「団体競技であることとレギュラーの入れ替わりが多いこともあって、まだ来年の東医体についての具体的な目標はもっていない。

しかし、悔いのない一年になるように部員一同で頑張っていきたい」

来年は今年以上に厳しい戦いを強いられることになりそうだ。しかし来年の夏にはきっとまた、東医体の舞台でバレー部が躍動する姿を見ることができるだろう。

（4年　石川貴大）

東医体後の集合写真

速報 武田純三病院長の再任が決定

院長就任2期目を迎えて

病院長　武田　純三（麻52回）

この度、医学部教授会、慶應義塾大学病院経営ボード会議の推薦を受け、塾長の指名により、慶應義塾大学病院長として2期目を務めることになりました。総合医療情報システムの導入、3号館南棟の建設と予防医療センターの開設準備、新病院棟の建設企画、旧棟の耐震化工事、新棟の老朽化による改修作業、個別指導による診療報酬制度への取り組みなど、多くの事業が目前に迫ってきております。また、この2年の間に各科別々であったカルテを一元化し、皮膚科外来の予約制を始めてきました。本年7月からは内科外来の予約制を開始し、来年には全診療科が予約制に移行する予定で準備を始めています。これに合わせてかかりつけ医制度の充実や、地域連携の推進を強化する必要があり、入退院センター、予約センターの設置・運用を進めております。

2期目に置いては、これまで行ってきた業務フローの改善を継続して行うと同時に、病院執行部の意向が院内の各委員会等に伝わるように、主な委員会には担当副院長を決め、執行部のガバナンスの充実を図りたいと考えております。また、新病院棟建設に於いては、新病院棟の基本計画、基本設計から、施工業者選定に至るまでの行程に入る時期となり、大きな決断をすることになります。同時に、外来のサイズ、手術室や病床数などを決定する必要があり、そのための重要な要因である新病院等で行う診療内容の検討を、各診療科と協力して、集約する作業に入りたいと考えます。また、医看薬によるチーム医療の促進だけでなく、技術職を巻き込んで、コメディカルの教育充実と病院機能向上を目指した仕組みの改修を推進いたします。

昨年度は診療報酬改定による影響もあり、黒字決算となり、新病院棟建設のための貯金をすることが出来ましたが、継続しての収支の改善は、病院経営の面から、また新病院棟建設のための資金獲得には不可欠であります。入院、外来とも患者単価は上昇していますが、平均在院日数の短縮に伴い、病床稼働率が低下してきております。入退院センターの機能の充実により病床稼働率の向上を図る一方で、支出の抑制、とりわけ診療内容を精査し、人件費や医療材料費、医薬品費の抑制を図り、新病院棟建設に向けて邁進したいと考えております。

硬式庭球部 昨年の雪辱を果たし優勝

昨年惜しくも4位という結果に終わってしまった硬式庭球部だが、今年は、昨年の悔しさをバネに優勝に返り咲いた。

特に印象に残るのは決勝の東北大学戦だと主将の林航輝君（93回）は振り返る。この試合では、ファイナルセットまでもつれ込む接戦の末にシングルとダブルスを落とした。後がないという状況まで追い込まれてしまったのである。しかし、雨天サスペンドとなってしまい、試合が翌日に持ち越しとなってしまう。再開した試合では、もう負けられないというプレッシャーのかかる中、2試合すべてに勝利して見事に優勝を果たしたのである。

今回も優勝という大変すばらしい結果を残してくれた硬式庭球部には、今後の関東医科歯科リーグでの優勝、さらには来年度以降の東医体の連覇も期待したい。

（5年　後藤信一）

雪辱を果たし喜びを爆発させた部員たち

馬術部 障害団体競技優勝！ 惜しくも総合準優勝

馬術競技は東京都世田谷区馬事公苑にて開催された。昨年度の馬術競技は総合6位と無念の結果に終わった本塾医学部馬術部。雪辱を果たすべく臨んだ今大会は障害団体競技で優勝と健闘したが、総合では準優勝と惜しくも優勝を逃した。

今大会には小笠原淳君（5年）、蛭川和也君（5年）、佐々木雅世君（3年）、小池一康君（1年）が出場した。小池君は慶應義塾高校でも馬術部に所属しており、インターハイ優勝経験もある期待の新人である。障害飛越団体競技決勝戦の最終選手として見事減点ゼロの走行を見せた。

馬術競技は各大学実力者が揃っており、本塾医学部は初日馬場団体3位、障害個人ベスト8で折り返すこととなった。2日目の障害団体では馬場団体で優勝した昭和大学を接戦の末下し、優勝に輝いたが、総合ポイントで準優勝に甘んじた。

なお今大会では主管校からの要請に応えて、全塾馬術部から2頭の馬（慶栄号、慶月号）が参加し素晴らしい演技を披露した。

主将の小笠原淳君（5年）は「東医体は終わったが、生き物を扱う部である以上、夏休みは時間の許す限り全塾の学生と共に長野で練習を行おうと思う。優勝まで後一歩のところでの準優勝程悔しいものはない。これをバネに秋の大会では優勝杯を持ち帰れる様、部員一同精進していく」と熱意溢れるコメントを寄せてくれた。

（5年　山西竜太郎）

優勝に輝いた障害団体の小笠原君（5年）

端艇部 12年ぶりの総合準優勝

12年ぶりに総合準優勝を獲得した端艇部。主将の梅田浩太君（4年）に取材した。

端艇部は近年部員が増加し、勢いを増している。しかし、他大学に比べるとまだまだ人数は多くない。そんな中、本塾主管のもと、男子シングルスカルの菊岡吉朗君（2年）が優勝に輝いた。それに続いて、女子ダブルスカル準優勝、新人ナックルフォア第3位、男子舵手付フォア第4位と、まさにたすきをつなぐように、多くの種目で得点を重ねた。その結果、総合で準優勝という栄光手にした。圧倒的な部員数を誇る山梨大学の5連覇は阻止できなかったものの、第二勢力としての存在感を示した。

端艇部は、41年ぶりの総合優勝を目標にハードな練習を行った。それに加えて、OBの先生方による造艇やエルゴメーターの増設、全塾OBによる技術指導、マネージャーによる例年以上のサポートと、多くの人々に支えられてきた。昨年の総合第5位から大きく成長したのは、すべての努力の結晶だ。

（4年　吉川裕紀）

12年ぶりの総合準優勝を勝ち取った

水泳部 男子7連覇達成 女子7位入賞

8月9日・10日に行われた水泳競技において、男子水泳部が優勝し、7連覇の快挙を達成した。この1年間水泳部を引っ張り、優勝へと導いたのは、主将の松井一晃君（4年）だ。

水泳部はこの1年間、「GOLD」のスローガンのもと、7連覇を目標に練習を積み重ねてきた。松井君は主将としてまず、部員全員の意識改革を行った。

さらに松井君自身、他の誰よりも速くなり試合で結果を出すことで、スイマーとしてあるべき姿を部員に見せるよう心がけてきた。実際、東医体でも50m、100m自由形でそれぞれ第3位、第2位に入るなど結果を残し、チームの優勝に大きく貢献している。

2位の東北大学には2点差という僅差で勝利したが、一時は10点程負けている時もあり、本当に苦しかったという。「僕自身何度も心が折れてしまいそうになったけど、その度仲間が立ち上がらせてくれました。今日まで支えてくれたたくさんの方々、そして一緒に戦った仲間に感謝したいです」そう松井君が語るように、優勝には仲間の存在も大きかったようだ。部員全員がどうしたら勝てるかを真剣に考え、優勝という同じ方向を向いて一丸となって頑張ってきたからこそ、7連覇という偉業を達成出来たのだろう。

だが、戦いはこれで終わった訳ではない。8連覇への意気込みと、それに向けた今後の取り組みについて聞くと、「次の幹部を信じているので僕からコメントすることは特にありません。この一年で成長した部員を更に高いレベルへ持って行ってくれるはずです」と答えてくれた。この言葉にも、仲間への心からの信頼が表れている。

（4年　石川貴大）

7連覇を喜ぶ選手たち

柔道部 個人戦でメダル獲得も 残るは悔しさ

講道館（水道橋）で行われた柔道競技では、慶應が好成績を残した。団体戦の予選リーグでは今年4連覇を達成した東海大学と引き分けてみせ、昨年と同じベスト16に入った。さらに個人戦では桐野創君（5年）が無差別級で3位、藤塚捷君（1年）が66キロ級で準優勝と、すばらしい成績を収めた。桐野君に話を聞いた。

昨年の個人戦では準優勝だった桐野君。今年の3位という結果は悔しさの方が大きい。桐野君は準々決勝で左の足首を痛めてしまい、準決勝で思うように動けなかったのだ。「今年は怪我をしてしまい不甲斐ない結果に終わってしまったけれども、来年は怪我することなく優勝を勝ち取りたい」と桐野君。悔しさをバネに来年是非とも優勝を勝ち取ってもらいたい。

また桐野君は、惜しくも昨年と同じベスト16に終わった団体戦について、「個人戦よりも悔しい。今年のチームは充実していたので決勝に行くつもりでがんばってきた。この悔しさをチーム全員忘れずに、秋にある関東大会や来年の東医体に向けてがんばります」と、悔しさを滲ませながらも力強いコメントをしてくれた。

（4年　石井斉宣）

得意の大内刈りで1本を取る桐野君（5年）

弓道部 男子個人戦で優勝！ 団体戦6位

東京武道館にて行われた弓道競技。本塾医学部は団体戦6位（120射64中）、男子個人戦では津崎盾哉君（4年）が優勝に輝いた。津崎君の喜びの声を取材した。

東医体弓道競技の団体戦は6人の選手が20射引き、合計的中数を競う。一方個人戦は、4射1セットを2回行う。特に個人戦は例年レベルが高く、全て的中させる選手が多い中、「正直2射目をはずした時点で入賞のことは頭になかった」と津崎君。その後は全て的中し8射7中で優勝決定戦に臨んだ。優勝決定戦は1人1本ずつ引いていき、的中しなかった選手が脱落する。最後まで的中し続けた選手が優勝だ。1射目では優勝決定戦に残った6名のうち3名が脱落した。2射目では最終選手の津崎君のみが的中し、見事個人戦優勝が決まった。

今年の東医体は男子個人戦優勝という輝かしい結果に加え、他の部員も東医体という大一番で好成績を出す事ができた。青山和樹君（2年）が5割の的中を出し、弓道を始めて間もない1年生も的中を出すなど、これからの弓道部を支えていくメンバーの活躍も目立った。

これからの1年間は津崎君が主将として弓道部をリードする。「東医体優勝目指して頑張っていきたい」とコメントしてくれた。今後の弓道部の活躍を期待したい。

（5年　山西竜太郎）

行射中の津崎君（4年）

ゴルフ部 6年ぶりの大快挙 男女ともに団体優勝

昨年は男子優勝・女子3位と、同時優勝を逃したゴルフ部。今年は男女ともに団体優勝という6年ぶりの大快挙を成し遂げた。

男子団体では、各日で良くないスコアをチームメイトが取り返し、団体スコアをまとめるという団結力の強さが、昨年に引き続く安定した優勝をもたらした。また男子個人戦では秋葉庸平君（3年）が初の個人入賞（9位）と、ゴルフ部の新たな力を大きく感じさせる結果となった。

一方の女子団体は、長らく団体優勝を逃し悔しい思いが続いていたが、女子個人戦で優勝の田中美波君（4年）、また初の東医体で見事個人10位の田中亜貴子君（4年）、そして初試合のプレッシャーに負けず自分の持てる力を出し切った大岡令奈君（1年）、3人全員の力・絆によって今年は優勝を果たすことができた。個人三連覇、そして初めての団体優勝を経験した田中美波君（4年）は「これまでご指導くださった先輩方、悪天候と疲労の中応援してくれた部員や監督、サポートしてくれたキャディなど、様々な人の助けがあって、またその想いに報いたいという気持ちがあって出せた結果だと思う」と嬉しさを語ってくれた。

90回生の卒業に伴い、メンバーが大きく世代交代した中で迎えた今年の東医体。主将の津軽開君（4年）は、「ゴルフ部にとっての正念場で、このように男女ともに団体優勝を果たせたことは、来る秋大会（10月）・春大会（3月）に向けて部員全員にとって非常に大きな自信となる」と今後に向けて良いモチベーションとなったと語る。

（4年　根木沙良子）

表彰式後、喜びに満ちたゴルフ部員

鑑賞知来

ダイエットとエクササイズがブームである。「メタボ」が流行語大賞を受けてはや5年。アンチエイジングに関心を寄せる人はますます増え、東京マラソンに限らずアスレチック・イベントは人気が出すぎて軒並みエントリーが難しくなった。NHKスペシャルは寿命を延ばすサーチュイン遺伝子を特集し、わが医学部新聞編集デスクの坪田一男先生は元気な百歳の著書を著された。健康的な生活習慣が身体にもたらす効果は、アディポネクチン測定や血管壁の画像撮影から疫学調査にいたるまで、様々なレベルの方法で根拠が示されている。ダイエットにせよエクササイズにせよ、気分調整の効果があることも周知の事実だ。このような健康志向がさらに広がり長続きすることを願う。そうなれば社会全体にインパクトが拡がるだろう。

この際、せっかくなら「知の健康」にも、もっと多くの人が意識を向けるようになればと思う。脳トレと称してパズルやゲームにいそしむのも悪くはないが、筆者としては、皆に推奨できる知の健康づくりの基本型は、活字に触れ、学び続ける姿勢を生涯保ち続けることだと思っている。医学界での長寿のチャンピオンといえば、現在もご活躍中の日野原重明先生や故人となられた秋元波留夫先生のお名前が浮かぶ。百歳長寿のご両人は知の巨匠でもある。常人には巨匠のパワーは真似できないが、身体と知性とが相まった健康を理想として追求したいものだ。腹八分目・散歩・新聞を読む、というだけでも十分健康的な生活習慣の礎となると思うが、マラソン人口がこんなにも増えている今日、知の領域では、古典を読み込んだり語学学習にいそしんだりするミドル級の知の営みがもっと拡がってもいいと思う。筆者自身は、トライアスロンで仲間が拡がったことに気をよくし、知の領域では当面のフィールドを西洋哲学と中国語に求め、独学を始めたところだが、この不安定な社会情勢のなかで気分安定効果があるようである。

（関　英一　衛生63回）